

記号機能としてのアーカイブズ

白須裕之

東京大学大学院人文社会系研究科

次世代人文学開発センター

概要

本稿の目的は、アーカイブズの活動におけるデジタルアーカイブの意味、及びアーカイブズにおける基本概念の意味を明確化することである。このため N. Goodman の導入した「記号体系」をその概念装置として使用する。「記号体系」は記号に関する一般理論の基礎であり、芸術だけではなく、科学や日常的な体験も含めて、言語的なものと非言語的なものを統一的に扱うための装置である。この「記号体系」の性質を調べることを通して、アーカイブズの基本概念を浮び上げることができる。また、このような議論によって、芸術論からアーカイブズ論への応用の道が開かれると期待できる。

Archives as Symbol Systems

SHIRASU Hiroyuki

The Center for Evolving Humanities,

Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

Abstract

The aim of this paper is to discuss *archives* as symbolic functions. N. Goodman's approach to art is part of a general approach to knowledge and reality. In his view, art is not divided from science and ordinary experience as symbol systems. Symbols classify parts of reality of us, and any symbol system is governed by syntactical and semantical rules. This paper discusses to apply the Goodman's theory of symbols into archival science, and tries to find a new way of understanding key concepts of archives as one of aesthetics. Then we can see that digital archives are *archives* of having the digital scheme of symbols.

1 はじめに

今迄にアーカイブズやデジタルアーカイブに対して、様々な考察がなされてきた(例えば、文献 [4][10][11] 等)。本稿の目的はアーカイブズやデジタルアーカイブに対する評価や批判、或いは哲学的、社会学的問題を議論するために、その基盤となるような一つの情報論的な考察を提供することである。

文献 [4] では、本来のアーカイブズの理論的根拠となる概念は「永久保存」であると述べ、デジタルアーカイブにこの概念を組み込むことによって、本来のアーカイブズの活動の中に、デジタルアーカイブを位置付けることを提唱している。本稿では「保存」されるものは何か、その対象はどういった性質を持ち、その性質の違いによって「保存」概念がどのように変わるのかを述べる。また、アーカイブズとデジタルアーカイブの関係を、その性質の違いによって説明する。

N. Goodman は文献 [13][14] において、記号に関す

る一般理論を展開し、芸術だけではなく、科学や日常的な体験も含めて、言語的なものと非言語的なものの障壁を踏み越えるような思想を提出している。本稿はその議論を踏まえて、「記号体系」という概念を手掛かりに、アーカイブズについて考えてみたい。

2 記号体系

本節では「記号体系」という概念を中心に、文献 [13] の概要を本稿で必要な範囲で整理しておく。

様々の芸術(音楽、舞踊、文学、絵画等)の解釈や、科学、日常の経験を理解することは、各領域で使用される記号を解釈することである。我々は対象を記述するために、あるラベルをその対象に適用する。即ち、ラベルの族はある領野の対象を分類するために使われる。このときラベルの族が分類した諸対象を領域(realm)と言う。記号図式(symbol scheme)とは、記

号の集まり、或いは合成規則を持つ符号 (character) の集まりを言う。記号体系 (symbol system) とは、領域と関係をもつ記号図式のことである。

2.1 記号体系の性質

記号体系の性質を議論するために以下のような用語を用意する。記号体系が構文的にある性質 A をもつとは、記号図式の符号の作る族が性質 A をもつこと、また、意味論的に性質 A をもつとは、符号に付随するオブジェクトの集合族が性質 A をもつことを言う。符号は交換可能なマークの集合からなる¹。

性質の例として、ここでは以下を使用する。対象となる集合族を $\mathcal{K} = \{K_i\}_{i \in I}$ とする。

1. 集合族 \mathcal{K} が素である (disjoint) とは、 $\forall i \neq j. K_i \cap K_j = \emptyset$ が成り立つことを言い、
2. 集合族 \mathcal{K} が分化している (articulate) とは、 $\forall i \neq j \forall m \notin K_i \cap K_j. (m \notin K_i \vee m \notin K_j)$ が成り立つことを言う²。

記号体系が構文的に素である場合、任意のマークは一つ以上の符合には属さない。また、記号体系が構文的に分化している場合、任意のマークがどの符合に属すか決定できる。即ち、符合は有限の差異性で定義されることになる。

ここでアーカイブを理解する上で重要な概念、「表記的図式」と「表記的体系」を導入する。記号体系が構文論的に素で、かつ分化しているとき表記的図式 (notational scheme) をもつと言い、さらに意味論的にも素で、かつ分化しているとき表記的体系 (notational system) であると言う³。

表記的図式、表記的体系の例 自然言語は表記的図式をもつが、表記的体系ではない。例えば、英語の場合、記号図式はアルファベット文字 (letters) である文字 (characters) からなる。各文字はその文字に対応する全てのマーク、即ち発声やインクの染みからなる。各マークは一つの文字に属す故に表記的図式をもつが、意味は様々な言葉で表現されるため表記的体系ではない。スコアによって作品の同一性が決まるある種

の西洋音楽は、その性質故に表記的体系である。同様に建築設計図等も表記的体系の例である。

上の二つの構文論的、意味論的な性質が成り立つ表記的体系に対して、絵画等の再現的な体系や言語的な体系についてその性質を見てみると、以下のような表に纏めることができる。

表 1: 記号体系の分類

	構文論的	意味論的
表記的体系	○	○
言語的体系	○	×
再現的体系	×	×

但し、表の「構文的」「意味論的」は各々、条件「構文的に素でかつ分化している」、「意味論的に素でかつ分化している」を示す。

2.2 記号の同一性と写し

ここでは記号 (作品) の同一性と写しについて述べる。以下は記号の同一性を区別する概念である⁴。

- **自書体のみ** (autographic) 記号体系 — 記号の同一性がその生産の歴史に依拠している、
- **異書体をいれる** (allographic) 記号体系 — 記号の同一性が構文論的ないし意味論的に決まる。

自書体のみ記号体系では、記号の真正性に意味があり、作家がその作品を制作したという史実が重要である。絵画や彫刻の場合、いかにその作品に似ていても贋物でしかない。

異書体をいれる記号体系では、記号の同一性が構文論的、意味論的に決まるため、記号体系の複製と記号の写しを以下のように考えることができる。表記的図式をもつ場合、記号の同一性が構文論的に決まる。即ち、記号はその綴りが同一であれば同じとみなせる。このとき、作品の上演、演奏、朗読が可能となる。更に意味論的な要請を加えた表記的体系の場合には、体系そのものの複製が可能になる。

次にデジタル概念について述べる。表記的図式がデジタルであるとは、記号図式に含まれるどの二つの符号も、効果的に分化されている図式を言う。画像記号の場合、記号はアナログ図式にも、デジタル図式に

¹マークの意味は以下の例を参照。

²この性質は古典論理では自明だが、直観主義論理では成り立たないことに注意。

³表記的体系であるためには更なる条件が必要であるが、本稿では述べない。文献 [13] を参照。

⁴文献 [1] では、これらの用語を「自筆的な autographique 作品、他筆的な allographique 作品」のように訳出している。

も含むことができる⁵。即ち、記号は単独では「デジタル」でも「アナログ」でもなく、これらの概念は記号図式に適用されるものである。

3 アーカイブズと記号体系

本節ではアーカイブズを記号体系として解釈する。芸術作品は勿論のこと、史料や科学理論、非言語的なものから言語的なものも含めて、アーカイブズは一種の記号体系である。但し、全ての記号体系がアーカイブズである訳ではない。この問題については次節で議論する。

3.1 記号体系の視点から

アーカイブズにおける保存とは、個々の記号を対象とするのではなく、記号体系を対象とする。従って、記号体系の性質によって「保存」の方法が影響を受けることになる。

デジタルアーカイブの行為は、その作品が属するようなデジタル図式を持つ記号体系を構築することである。但し、作品の意味をより良く表現するような指示機能をもつ記号体系が要求される。

自書体だけの記号体系の場合、作品の同一性がその生産の歴史に依拠している以上、そのものをそのまま保存することになる。しかし、自書体だけの記号体系といえども、その保存、修復について考えてみると、劣化を防ぐべきものは何か、何を残すように修復するのかという意味論的な問題を考えない訳にはいかない。異書体をいれる記号体系の場合、その構文論的、意味論的な性質が問題になる。

文献 [7] では、「永久保存」の概念を形式的定義として読むことを提唱し、アーカイブズの二大要件を以下のように纏めている。

1. データ群が時間を越えて価値を保つための処理、
2. その状態の維持を信頼できること。

今迄の議論によって、この要件を以下のように部分的に再解釈できる。即ち、「価値を保つ処理」とは記号体系を構築することであり、「状態の維持への信頼」は表記体系的複写可能性に求めることができる。

⁵ドットパターンによる画像を樹目で区切られた一枚のカードとする。カードの束の作り方によって、その束はアナログにもデジタルにもできる ([14] 参照)。

言語的体系は表記的体系ではない故に、意味論的な曖昧さを伴う。例えば、文献資料をデジタルテキスト化するだけでは、意味論に言及できないためデジタルアーカイブとは言えない。指示機能が言語共同体に支えられている故に、かえって「保存」概念の再考が必要になる。

アーカイブズにおいて、文献 [7] では、データ群の価値とは「書かれたもの」のみを独立させるのではなく、その周囲の構造が重要であり、その維持とは即ち構造の保存としている。これは意味論的にはデータの意味を構造が表現し、また構造の保持が意味の保持を約束していると読むことができる。即ち、上の二大要件をこのような別の方法で保証する必要が出てくる。

このような対象とその文脈という二層構造を記号体系として解釈すると、本稿の記号体系によるアーカイブズへのアプローチは、以下のテーゼとして提唱することができる。

アーカイブズとは「指示機能の再現」を行なう記号体系であり、アーカイブズの「永久保存」という概念は、この「再現」がいつでも行なえる仕組みのことである。さらにアーカイブズの活動とは「表記的体系」を求めるとにほかならない。

しかし、記号体系がいつでも芸術である訳ではないのと同様に、記号体系がいつでもアーカイブズたる訳ではない。この問題については次節以降で議論しよう。その前にアーカイブズの構造との関係を議論しておこう。

3.2 アーカイブズ情報

実際のアーカイブズにおいては、様々な様態のアーカイブズ情報が考えられる。対象と文脈という二層構造は、実際には多層構造を形成している。例えば、文献 [4] ではアーカイブズ情報の構成部分について、以下のように纏めている。

アーカイブズ情報は、その中に少なくとももつぎの六つの構成部分を持っている: A 内容情報, B 脈絡情報, C 構造情報, D 制御情報, E 情報的媒体, F 物的媒体。これらのセットが、単数ないし複数、個別ま

たは階層的に集合として存在する。… A～Dは、アーカイブズを把握する単位のレベルにより、具体的にはそれぞれ重なり合い明確に分けられない。… 収集の情報は、少なくとも群の最大単位ではB～Fのいずれかとして提示されるべきである。

Fを最下層のレベルとして、各々の階層は情報の確かさを保証する。これは上位レベルの意味を下位レベルが与えている訳で、複数の記号体系が含まれていると解釈できる。階層が情報に意味を与えている。このような視点から、これらについての正確な解釈は個々の分野、個々の記号体系で考察していかねばならないであろう。

4 情報化時代のアーカイブズ

現代のアーカイブズに関連する分野は、その研究領域および研究の歴史を考慮するだけでも、その膨大な研究成果に圧倒される⁶。そのためにアーカイブズについての基本的な議論がし難い状況にあると言えるのではないだろうか？ 文書等を扱う史料論、近現代の公文書論、企業記録また博物館学等の対象を一つの統一的な視点から見ることができるであろうか？ また、このような状況では「アーカイブズがどういふものか？」という問い自体も、見極め難い。本節ではその意味について歴史的な観点からもう少し議論してみよう。

W. Benjaminは論文『複製技術時代の芸術作品』において20世紀の歴史と芸術の変貌について議論している。本稿ではGoodmanの記号体系による芸術論への接近と、Benjaminの芸術論を踏まえて、芸術論からアーカイブズ論への道筋を探りたいと思う⁷。

4.1 いつアーカイブズなのか？

Goodmanの芸術論では、芸術作品とはどのような機能を担う記号体系であるかを議論する。しかし、これは「芸術とは何か」という問いに答えようとするのではないと言う。芸術の本質よりも芸術が担う機

能に議論の注意が払われている。同じ記号体系が芸術的であったり、そうでなかったりという事態を見るとき、Goodmanは「いつ芸術なのか？」という問題を議論しようとしている。アーカイブズ論においても、「いつアーカイブズなのか？」ということが重要な視点であろう。そのためBenjaminの芸術作品に対する歴史的な考察、技術と知覚の関連についての議論を眺めてみる。

4.2 技術と知覚

文献[9]では、この論文が書かれたのは、Benjaminが「芸術作品の質が凋落することではなく、これまでの形式/内容の枠組みで捉えられてきた、いわば自立的な芸術理論が根底から崩れていく歴史を感じていたのだ。」と指摘して、Benjaminの議論のユニークな論点を以下の二つとしている。

第一に、芸術生産の技術に注意を向けたことであり、第二に、ある時代に形成される知覚を重視したことである。この二つの問題が『複製技術時代の芸術作品』全体をつらぬいている。(文献[9] 14頁)

Benjaminの時代、複製技術が芸術を変えたという指摘のみでは、その真意を読みとっていないと指摘する⁸。Benjaminが主に取り上げている写真や映画等の複製技術の登場によって、芸術の「礼拝的価値」から「展示的価値」への変遷が、芸術概念を変えただけでなく、以下に引用するように芸術概念の存在そのものが揺らぎ出し、芸術の本質を問うことの根拠が喪失したことを指摘する。

そもそも芸術というものが時代の形成する知覚と切り離せないとすれば、そのことは時代を超えて芸術を成立させる共通の根拠がないことを示しているかもしれない。(文献[9] 14頁)

ここにもアーカイブズの本質ではなく、「いつアーカイブズなのか？」という問題への通路を感じざるを得ない。

⁶現代アーカイブズ学の研究領域を総合的に議論したものに、例えば文献[2]がある。この文献に目を通しただけでも、この分野の広さが感得できよう。

⁷筆者は芸術論の専門家ではないため、ここでの考察はアーカイブズ論への初歩的な試みにすぎない。専門家の議論が待たれる。

⁸Benjaminが指摘するアウラを持つ芸術作品と、自書体だけの記号作品との関連は示唆的であるが、本稿では扱わない。

4.3 作品生産における技術

芸術が「展示的価値」の優位を主張する現代において、アーカイブズもまた「複製技術時代」以降を考察の対象としなければならない。Benjaminは「複製技術」が作品生産における技術としての使われ方に注目する。写真が絵画を複製する場合と、映画が仕組まれた事象をスタジオで複製する場合とを比較して、その複製のしかたの違いについて以下のように述べている⁹。

前者の場合には複製された対象が芸術作品であって、複製が作品を生産するわけではない。... スタジオのなかでの撮影では、事情は違ってくる。この場合には、複製される対象が芸術作品だ、ということとははやない。... 芸術作品は、モニター・ジュに依拠して初めて成立する。¹⁰

として、映画における編集の価値を強調する。これはBenjaminがギリシャ芸術との対比で、現代芸術の性質を以下のように述べていることと符合する。

芸術作品にもっとも認めがたいもの、あるいはそうでなくても、芸術作品のもっとも本質的でない性質と見えたであろうもの、... その性質とは、作品を、より良く作り変えてゆくことを可能とする性質にほかならない。¹¹

このような複製技術による新たな生産の示唆は、文献[5]がアーカイブズにおいて重視する「キュレーション」と継がるものがある。展示にはテーマやコンセプトの提示があり、作品の展示方法によってある種の解釈を与えていくものが「キュレーション」である。文献[5]は以下のように述べる。

「デジタル」を作成することに関わる人間は、文化遺産を作成することはできない。しかし、文化遺産を読み直し、一つのまとまった「デジタルシステム」を作り上げることによって新たなメッセージを発していることは間違いない。

これはまさに映画の制作について述べた Benjaminの先の引用と符合する。「複製技術時代」に果した映画の役割と対比して、デジタルシステムが情報化時代のアーカイブズにおける新たな作品生産の技術であることを示唆しているだろう。これらの問題系の解釈は、複数の記号体系から新たな記号体系を構築することになるのかどうか？ この視点からの考察については今後の課題としたい。このような作品の創作技術についての考察も、「いつアーカイブズなのか？」という問題系に繋るだろう。

5 おわりに

本稿では記号機能としてアーカイブズを解釈するために、Goodmanの記号体系をその道具として使用した。これによってアーカイブズにおけるデジタルの意味、及びアーカイブズにおける基本概念の意味を明確化できたと思う。しかし、記号体系が「いつアーカイブズであるか？」という問題に対して、そのための議論が残されたままである。

また逆の意味で、記号体系によるアーカイブズの解釈は、全てのアーカイブズの行為を捉えるには不十分である。ただ本稿のような意味論的な接近は、各分野のアーカイブズが、その意義を説明できるような意味論の構築へと発展せねばならないことを示唆しているように思われる¹²。

文献[11]では、「文化の次世代への正しい継承」という運動への相対化の方向で、デジタルアーカイブを活用することを論じている。アーカイブズが記号体系を対象とするものであるならば、その意味論を明確化することは、その行為を文化的に相対化する機縁を与えるであろう。

従来、保存という視点から、デジタル化という情報劣化を議論する場面が多かったが、記号体系としてのアーカイブズの視点から見ると、明確な情報の付加ということ、さらに前節で見た新たな創作技術としての再解釈という積極的な面も評価すべきであると思う。

最後にアーカイブズが本稿で述べた意味論的な存在として捉え直されると、従来、アーカイブズ学で言

⁹W. Benjaminの論文『複製技術時代の芸術作品』の邦訳はいくつか存在する。引用は野村修訳、岩波文庫或いは文献[9]所収のものを用い、節番号のみを記す。

¹⁰『複製技術時代の芸術作品』X節

¹¹『複製技術時代の芸術作品』VIII節

¹²デジタルテキストとしての文字の表現を本稿の立場で扱ったものとして、まだ不十分ながら文献[8]を参照して欲しい。

われている情報の真正性、信憑性、信頼性の意味も変容するであろう。これについては今後の研究課題としたい。

謝辞 本稿の動機はCH79での[4][7]の発表に際して、「永久保存」の概念を意味論的に捉えたらどうなるか、という守岡知彦さんとの対話に端を発している。守岡知彦さんに感謝いたします。次世代人文学開発センターでお世話になっている下田正弘先生に感謝します。永田研宣さんには多くの助言を頂きました。概要論文に対して査読頂いたお二人の方からは有益なコメントを頂戴しました。また、お世話になった多くの方の助力に感謝いたします。最後に妻留美と家族に感謝します。

参考文献

- [1] 尾河直哉: ジュネット詩学の展開 — N. グッドマンとの関わりにおいて, [6] 所収, 2004.
- [2] 国文学研究資料館史料館編: アーカイブズの科学, 柏書房, 2003.
- [3] 五島敏芳: アーカイブズ情報の電子化とネットワーク, [2] 所収 下巻 IV 部 2 編 5 章, 2003.
- [4] 五島敏芳: 「デジタルアーカイブ」における永久保存の概念, 情報処理学会研究報告, 2008-CH-79, 2008.
- [5] 後藤真: 文化遺産学における「デジタル」序説—保存と共有・活用と表現—, 情報処理学会研究報告, 2008-CH-79, 2008.
- [6] G. ジュネット (和泉涼一, 尾河直哉訳): フィクションとディクション — ジャンル・物語論・文体, 水声社, 2004.
- [7] 鈴木卓治, 五島敏芳: パネル討論「アーカイブズとデジタル技術の未来を考える」(2) アーカイブズ概念とデジタルアーカイブ, 情報処理学会研究報告, 2008-CH-79, 2008.
- [8] 白須裕之: 文字の指示機能に関する試論, 情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん:-)2008」, 2008.
- [9] 多木浩二: ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読, 岩波現代文庫, 岩波書店, 2000.
- [10] 永崎研宣: デジタルアーカイブの弁証法, 情報処理学会研究報告, 2005-CH-68, 2005.
- [11] 師茂樹: 「デジタルアーカイブ」とはどのような行為か, 情報処理学会研究報告, 2005-CH-66, 2005.
- [12] A. Giovannelli: Goodman's Aesthetics, Stanford Encyclopedia of Philosophy, 2005. <http://plato.stanford.edu>
- [13] N. Goodman: Language of Art — An Approach to a Theory of Symbols, second ed. Hackett Publishing Company, 1976.
- [14] N. Goodman, C.Z. Elgin: Reconceptions in Philosophy & Other Arts & Sciences, Hackett Publishing Company, 1987. (邦訳 菅野盾樹: 記号主義, みすず書房, 2001.)